

再考 『あ・うん』

——自我と他我とのせめぎあい——

おとなは、大事なことは、ひとこともしゃべらないのだ

（「やしろべえ」¹）

水田仙吉の娘さと子は、仙吉・たみ・門倉修造の三角関係を知りながら、それを口に出すことなく死んだ祖父の初太郎の亡骸の前にこう思うのであった。

作者向田邦子もまた「大事なこと」を表だつて語っていないように思われるのは、水田仙吉と門倉修造の友情と、仙吉の妻たみと門倉のプラトニックな恋愛が作者の提示したとおりに読まれ、通説となつていふからであろう。同時に何か心にひっかかるが、それが何なのかはつきりしないということをも読者は感ずるだろうと思うのである。そのひっかかりを解こうと作品に向いあうと不審の印象がたち

山 口 みなみ

まちにして消失するか、その逆に霧がたちこめたようになつてわからなくなる。『あ・うん』は、まだまだその「何か」が読み解かれるのを俟たれている作品なのである。

『あ・うん』の書きぶりについては山口瞳が述べているように²かなり急いだ苦心の作である。それは読者の目にも明らかで、単なるドラマのノベライゼーションとは違うが、完全な小説とも言い難い。また『あ・うん』のテーマに関しても、友情と三角関係を軸として、疑問がないと思われているからなのか、友情と三角関係という枠を越える視点をもつた先行論は多くない。あえて挙げるとするならば小林竜雄、高島俊男、鴨下信一の三氏の論があるばかりである。また、後半で論ずることになるが「女の自我のあり方」³について、栗原敦の重要な指摘がある。栗原の述べるとお

り、女の自我という点をより深く追及し論を展開する必要
がある。本拙稿はその途上である。

とにかくこの作品に注目すると興味深い点があることは
確かである。もちろん、小説『あゝうん』の自筆草稿とかノー
トとかいうものがあればそれに越したことはないが、現在の
ところ残念ながらそれらが残されているという情報はない。¹
だが幸いにしてヴェリアアントとして単行本とは別に、雜
誌発表の段階のものが存在する。これらを比べると些細と
は言えない加筆・訂正による相違があることに驚かされる。
言うなれば作者向田が、駆け足で通り抜けたときの息遣い
のようなものを窺うことができ、これらの跡を検証しつつ
あわせて友情や三角関係の話によって背面へ追いやられて
しまった読みの可能性を探ってみようと思ふ次第である。

仙吉の同化願望

水田仙吉と門倉修造の友情は、「寝台战友」と称するよう
に兵役やら軍隊生活に起因した友情である。作中、「寝台戦
友」の意味を解さないロシア人女史に二人は「世間並の友
情を清コンソメとするならば、これはポタージュである」と説明
している。この「寝台战友」に関しては「氣持のわるい」²
関係で理解しかねるとする向きや、「同性愛」的だが「戦

前にはこうした男の友情というのは存在した」³のだとする
向きとがある。仙吉と門倉の友情に対する印象を、一方は
否定、一方は肯定的に述べた高島、鴨下両氏の年齢がそう
違わないことは興味深いことである。この「ポタージュ」
のような友情は、現在でもスポーツなどで苦楽を共にした
間柄には相通ずるものがあると思う。生死をかけた極限状
況を前提にして共同責任を課せられるなかで培われるもの
だから格別なのもつともなのだろう。

しかしながら、こうした氣持わるさ、あるいは同性愛的
とも呼ばれかねない二人の関係そのものよりも前に、まず
目に付くものがあり、そのことに言及することが忘れられ
てはならない。それは徹底的に比較・差別化された仙吉と
門倉の姿である。もちろん、向田は意図的にそのようにし
ているし、当然その点は誰もが認識しているに違いない。
たとえば以下のような描写である。

仙吉は門倉とあい年である。門倉は羽左衛門をもつ
とバタ臭くしたようなと言われる美男で、銀座を歩け
ば女は一人残らず振り返るといわれたが、仙吉のほう
は、ただの一人も振り返らない男だった。見映えのし
ない外見に重しをつけようというつもりか、鼻の下に
チヨビひげを蓄えている。その分だけ分別くさく見え

た。(狛犬)

仙吉は何を着ても着映えがしなかった。体つきもよくなかったが、つまりは華がなかつたのだろう。門倉は偉丈夫で、仙吉はせいぜい番頭だつた。門倉がつけばステッキだが、仙吉が持つと按摩の杖になつた。門倉を花とすれば、仙吉は葉っぱである。門倉には、そこにいるだけでまわりをたのしませるものがあるが、仙吉が入ってくると、一同理由もなく気づまりになり、気がたびれがした。(同)

一見、面白おかしくその違いを挙げてはいるが、その奥には決して面白くもおかしくもない、真剣で切実なものが横たわっているように思われるのである。それは人間の生存に関するかなしみと言つてもよい。いわば作者は意図的に仙吉にある種のかなしみを背負させたのである。

まず仙吉の性質に関することを確かめなおしてみると、融通の利かない頑固者で、賭け事が嫌い。学歴にコンプレックスがあり、一介の月給取りである。ついでに言えば女遊びができるような甲斐性は持ち合せていない、と、こんなところであろう。門倉の性質はほとんどその正反対であると言つていい。現実の友人関係を考へてみても正反対と

言えるような人間と無二の親友となることは珍しくもないことである。はたから見れば「どうしてこんなに気が合うのか」と思うのだろうが、当人たちはきつと、「だからなのだ」と言うであろう。しかし「だからなのだ」という言葉の裏には、実際なかなか複雑な感情が潜んでいるに違いない。向田もその複雑な感情について強調している。

人間には、人に見せない、見せたくない顔があるものです。「あ・うん」の主人公水田仙吉は、しがない月給取りですから、軍需成金で美男の親友、門倉修造を妬ましく思わないわけがありません。(「甘くはない友情・愛情」)

さらに門倉は仙吉の妻たみに惚れている。とはいへ、人間としての門倉に仙吉は惚れているのだと同エッセイで向田は語っている。作者向田も言うように仙吉は門倉が羨ましいし、嫉んでもいるのだ。その感情の深いところには「自分もあなりたい」という願望がある。実際、仙吉は門倉に同化しようとさえするのである。この同化願望の背景を掘り下げてみよう。

作品の序盤、三年ぶりに高松から東京へ戻つた水田一家は、門倉の心づくしで旅路の疲れを癒す。たみだけは食欲

がなく鱧に手を付けない。作者ははじめそのことを伏せておく。たみにもそれを隠させているが、間もなく事実が判明する。つわりだった。たみは妊娠したのである。さと子以来十八年のことに仙吉やたみは恥じ入っていたが、仙吉と連れ立って外に出た門倉は「……弥栄じゃないか」と、往來で万歳を連呼する。一息あつて、今度は思案する体で、もし生まれてくる子が女なら自分に譲ってほしいと打ち明ける。何でももっている門倉ではあるが、妻の君子との間には子がなかったのだ。申し出に感激した仙吉は、たみに相談することなく「男だったら勘弁してくれ。女だったら喜んで進呈する」と勝手に約束してしまうのである。しかし、どんな義理があつても子どもをよそにはやれないとたみは仙吉を詰り、断わってほしいと強く抗議する。長くなつたがあらましである。明治生れの仙吉は、いちいち妻に相談などせず家長の権限を行使しようとしたのであつた。安易なように感じられるが、親族間での養子のやりとりは決して珍しくもなかった時代である。門倉は親戚あるいは家族同様であつたから、仙吉は快諾したのである。仙吉とたみの生育環境の違いもあるが、自分の子を他人にやるなど考えられないというたみの自己主張の強さはかなり戦後に描かれている。門倉だからこそ、たみは生れてくる子を渡したくないのだとする小林の主張には同意するが、『あ・

うん』の時代背景を踏まえておく必要があるだろう。¹⁵

「お前はうれしくないのか。あれほどの男が、おれたちの子供を欲しいと言ってるんだよ」

(略)

「あいつはなんでも持つてるんだよ。地位もある。金もある。いい親戚もある。弁も立つし友だちも多いよ。人にも好かれるよ。背も高いし男っぷりもいい。女にももてる。おれはな、お前だから言うけど、今度うまれたら、ああいう男になりたい。心底思うね。それと」

すこし言いよんで、
「あいつは、お前を買ってるよ。あれだけ女にうるさい奴が、お前の言うことだけは聞くじゃないか」(「狛犬」)

しかし仙吉とて、自分の子をよそへやるなど相手が門倉でなければ思いもよらないのは確かである。問題はまさに「門倉だから」という点で、先にも触れたが仙吉にとつて門倉は決して他人ではないのである。「今度うまれたら、ああいう男になりたい」という切なる願望があるからには、現世だってそうなりたのであるが土台無理である。したがって懂れている門倉から重大な頼みごとをされたことが

誇らしかったに違いない。門倉の足りないところ（子）を自分が補って、完全な男に近づけてやりたいのだというところも感じ取れる。コンプレックスの塊のような仙吉は、門倉に同化することではか自分を肯定できない。男としての自分に、露程も誇れるところがないと思ひ込んでいる。向田の書き方はそこを強調している。だから子どもさえも自分の一部として門倉に捧げてしまえるのである。だが、たとえば門倉が俗にいういい男だとしてもそれは絶対ではない。仙吉の方が勝っているところだつてあるはずである。それを差し置いて、門倉がもっていないで自分がもっているものは妻と子どもと、他ならぬ門倉だと、自分の外に置いているのは痛々しくもある。

仙吉が門倉に同化しようとする試みは大小を問わずたびたび起こる。門倉が飼っている犬を飼いたいと言ってみたり、門倉が使用している流行ものを自分も使ってみたりするのだが、これらは自分の憧れている人間に近づきたいとか好意を示すときに人間が取ってしまう行動である。この程度のものは真似ということで済むが、あるとき自分自身のうちで抑制していた欲求を爆発させてしまう。つまり門倉に起因したのではなく、純粹に自分の欲求ということである。これは後に触れたいと思う。

仙吉は門倉のようになりたいと常から思っているのだ

が、実はこのような仙吉の性質の形成には、もう一人大きなファクターとなっている人物がいる。誰であろう仙吉の父親の初太郎である。初太郎は七十になる老人だが、その昔仕事で木材の買い付けをしたことから山に憑りつかれ、勤め先を辞めて山師となった。しかしそうそう容易く大金を手にするわけもなく、不遇のうちに妻を死なせ、仙吉も昼間の大学に通うことができなかつた。あげくは仙吉の預金にまで手を付ける始末であつた。以降十年も仙吉は「扶養の義務は果す代り、ひとことも口を利」いていない。そんな初太郎も門倉のことは嫌いでないらしく、お互い木の話やら門倉の工場で作っている製品の話やら、金儲けの話を楽しんだりする。

初太郎と門倉はまったく同じではないが、基本的には家族や世間に遠慮するというところが少なく、好きなことをやっている点で共通するところがある（もちろん当人なりに遠慮はしているだろうが）。決定的に異なるのは成功者と失敗者というところであろう。家族を、自分を不幸にした失敗者の父親を、仙吉が許せないのも理解できる。たとえば、もらったばかりの賞与を、初太郎に取られないように用心しろとたみに注意する場面がある。

初太郎の咳き込む気配がした。

「金、気をつける」

「一軒のうちで……」

「前にやられてるんだから。お前、肌から離すな」

「あした一番で積んで来ますよ」

「夜学だなんだって言われながら、汗水たらして半年

働いた分なんだ。徒や疎かに扱わないでくれよ」

聞えよがしの大声だった。（蝶々）

好き勝手に振る舞って家族を犠牲にした初太郎という失敗者のモデルと、自分もつていない物をなんでも手に入れた成功者の門倉の姿が、嫌悪と憧れというかたちで仙吉の内に併存しているのである。仙吉のコンプレックスの原因の大半が初太郎からきており、本当のところは門倉みたく生きてみたいが自分の柄ではないし、初太郎へのあてつけというところもあつて、かなり自分自身を矯めているところもうかがえる。つまり曲がりたくても曲がれないのである。逆を言えば、初太郎の存在は仙吉の欲求の高まりに制約を与えているとも考えられるのである。

初太郎の死後、仙吉が芸者にのぼせて月給を前借する事態となり、ついには実印を持ち出そうとする件に、初太郎と仙吉との類似を見出すことができる。

しっかりと握っている仙吉の右手に、たみは歯を立て

た。あいてて、とたまらず掌をひらき、実印が壘に転がった。

（略）

「男にはここ一番というときがあるんだ。そういうときにケチケチしてたら、ケチケチした人間で終るんだよ。門倉を見ろよ、門倉を。あいつの器量は遊ぶべきときには豪気に遊ぶというところから来ているんだぞ」

（「四角い帽子」）

初太郎存命中、嫌悪をもって対峙してきた仙吉が、自ら曲がった方向に足を踏み入れようとしている。しつこいよすがが繰り返すと、もともと仙吉は門倉みたくになりたいと思っていたが、そうなれなかった。初太郎が死に、知らず知らずのうちに矯正していた部分顔顔をのぞかせたのであった。問題は、門倉を引き合いに出しているが、それは言い訳であるということである。ここでは門倉のようにになりたいということよりも、具体的な自分の恋、欲求が動機なのである。このままいつたら身をあやまると門倉は仙吉を諭すが、確かに初太郎と同じような轍を踏むのは目に見えている。

結局門倉が芸者を落籍させたことで、仙吉は深入りせずに終わったが、仙吉の側に立ってみれば多少のやるせなさも

残る。もともと、仙吉は自分を卑下し、親友を立てるところのある人物である。自分は神や仏からは可愛がられないようにできているとか、来世では門倉とたみが夫婦になったらいい等、あげればたくさんあろう。同じ人間として埋めがたい差を感じるのは、外見や性質の問題だけではない。できる人間とできない人間がいるという理不尽である。もちろん仙吉自身もその理不尽をよく理解していて、ある程度は納得している。だからこそ自分を卑下するのだが、卑下することは他人が自分をどう思っているかを知る物差しでもある。だが他人から、自分の性格や性質の欠点をあぶりだされるのははるかに痛みを伴う。先に例にあげた場面と前後するが引用する。毎晩のように芸者に入れ込んで帰りの遅い仙吉は、門倉と飲んできたのだとたみに嘘をつくが、門倉は一足先に水田家へやってきていたため嘘がばれてしまうのである。

「お前だって、おれの名前、だしにしたことあるだろ」

「しよっちゅうだよ」

「ほれ見ろ。世の中持ちつ持たれつだ」

「そうだけどさ」

「現にお前と一緒のこともあったよなあ、例の神楽坂の。今晚もあそこだよ」

門倉は黙って雑巾を仙吉の前に置いた。

「なんだよ。雑巾で顔拭けって洒落か」

「丹精してあるだろう。よく見ろよ、って言いたいんだよ」

痛いところをつかれた仙吉は、また笑ってみせた。

「女房泣かせてる男が偉そうに」

たみが口をはさんだ。

「門倉さんはいいのよ。門倉さんは馴れてるもの。抵抗力があるもの。でもお父さんは」(同)

たみは身内である夫に向けて言っているのであるから、門倉のことは棚に上げた言い方をしているのである。しかし、「女房を泣かせてる男が偉そうに」と仙吉が口にするのも人情として十分理解可能である。できる人間とできない人間は、時として、やっていい人間とやってはいけない人間でもある。自分でもわかつてはいるが、自分以外の人間からもそれを押し付けられてしまうのである。なまじ、少しくらいならと、できない人間が道をそれると「天網恢恢カイカイ疎ニシテ漏ラサズ」ということになるわけである。できない人間、やってはいけない人間のかなしさがここにある。断わっておくが、いまは倫理の観点からは論じていない。それにしたって、体に電気が走ったようになって「生れて

初めて女にのぼせたんだ」という仙吉の恋はなんとすべきだろうか。融通が利かなくて、皆を気づまりにさせる。疎んじられながらも変えられない性質を抱え、憧れている親友のようになりたいと思う。仙吉は自分と他人との波打ち際で佇んでいるのである。

結局のところ仙吉は門倉と同化することも、門倉を補ってやることも満足にはできない。門倉はたみに惚れているが、来世ならともかく、今すぐにたみを捧げることはできない。たみの自我を自分に溶かし込むことができて思うとおり動かせぬなら、それは仙吉のコントロール下なので仙吉の自我の延長として捧げられるかもしれない。だが、たみは夫に従順なようだがそれだけではない。次項でそれを探ってみようと思う。

母娘の自我と性愛を廻って

結婚生活を続けるにしても、友人として付き合っただけにして、絶対に超えてはならない一線があることはそれぞれ自覚している。ここまではいいがこれ以上はいけないという認識は確かに存在するのである。「どんなことがあっても主人を裏切っちゃいけない」という規範がたみのなかにあるかぎり、三人の関係やその周囲を含めた共同体が崩

壊することはない。妻であることも、母であることもたみには疑問はない。門倉とのいわゆるプラトニック・ラブは、むしろこうした制約・条件のうえで始めて成立しているのである。しかしプラトニック・ラブとは言うものの、突き詰めれば肉体的欲望に結びついてしまうのではないかという気さえする。向田は一体どのように捉えていたのだろうか。

ところで、たみの外見的特徴は「格別綺麗」でもなく、「色の白いだけが取柄のありきたりの顔立ち」といったものである。仙吉や門倉ほどには特徴が書き込まれていない。このほんやりとしたイメージこそ、向田が常に抱いていた理想の「昔、沢山いた日本の女」¹⁰像である。「日本の女」とは一口に言って良妻賢母のことである。しかしたみには、ふとした瞬間の表情や態度に、いわゆる性的意味での「女」を立ち上らせているのである。向田はこうした良妻賢母が普段おくびにも出さないものの、実はもっているはずの「女」を捉えようとしたのだと言えるだろう。「妻」や「母」に「女」が存在することや、それが表れ出るとはしばしば嫌悪されるが、隠された奥には「女」を抱えているものである。「女」が強く表れると批判を受けるか自己嫌悪に苛まれることとなるのである。これは役割に女性を押し込めてきた結果といえるのだが、向田の書きぶりは鬱屈した

女の性・自我という方面とはまた違って、自ら隠そうとして隠しきれずに一瞬間見えてしまうとといった、むしろ役割を全うしようとする「妻」や「母」の性愛や自我の物語なのである。どんな人間も二十四時間ずっと「女」や「男」でいるわけではない。¹²向田は「日本の女」という存在を尊敬し慕っていただけではなく、どこまでも夫を立て家族を支えるその姿の奥にある何かを嗅ぎ取っていたのである。

こうした「日本の女」の典型であるたみの外見的特徴を、さと子にも踏襲させるのである。もちろん母と娘の血のつながりによる相似でもあるのだが、本文には「母親そっくり」とあるだけで（文学を好むといった内的一面はあるが）それ以上には書き込まれていない。細かい描写ではなくとも登場人物をイメージさせることに長けた向田であるはずなのに、外見的特徴となるような明確な色付けは避けているのである。「日本の女」でくくられた、一見すると没個性的な母と娘の自我と性愛を浮かび上がらせているのではないかと思われる。連綿か、あるいは変化か。たみとさと子の二代にわたる女の自我と性愛を検証してみる必要がある。

たみとさと子が門倉の靴を揃える場面で、鋭く嗅覚を働かせている描写がある。話題にしたことはないのに、二人とも似たような感想を有している。

たみは門倉の靴を揃えた。夫よりひと廻り大きいコーボンの新品である。新しい皮は、若いけもの匂いがする。（「狍犬」）

さと子は靴の匂いにも男と女があることに気がついていた。門倉の靴は父の仙吉の型崩れした盤広の靴にないい匂いがする。（「四角い帽子」）

客の脱いだ靴を揃えるという家長制下で見られる女子供の役割が、ここでは性そのものを感じ取らせる要因となってしまう。揃えてもらっている方（揃えさせている方）はそんなことをまったく知らず、揃えている方もほんの一瞬間兆すだけのようだが、小さなはずみやがて大きなエネルギーとなる可能性は誰にも否定できない。たみはこうした刺激を多少は警戒するが、さと子の方は若さゆえの無邪気さも手伝ってか、ほとんど受容してしまっている。それは次にあげる場面からも明らかである。門倉の愛犬パロンに顔を舐められ「大きいけものに甘えられるのは悪くない気持ちで、なまぐさい匂いも嫌ではなかった」と思い、見合い相手辻村の顔に剃刀負で「血がこびりついているの」を見、「じきんとしてからだが熱くな」ったりする。しかも

どれをとつても不快なものではない。もう少し例を挙げてみる。

さと子は、辻村の下宿で、はじめて接吻をした。

(中略)学生服の脂くさい匂いと、煙草の匂いがした。甘い味がすると書いたのを読んだことがあったが甘くなんかなかった。(「やじろべえ」)

さと子は改めて、男臭い匂いに鼻が曲りそうになった。天辺てんぺんの部分は黒いラシャの布というより脂のじんだ革である。父の仙吉が、昼過ぎから雨になるでしようという天気予報のとき履いてゆく、古い革靴そつくりだった。不思議なことに、汚いとも嫌だとも思わなかった。(「四角い帽子」)

たみの妊娠に際し、たみに「女」の一面があることを知つて少なからぬ嫌悪を感じたさと子が、自らの性に目覚め求めてゆく様子が婉曲に示される。生臭さや獣のモチーフは短編「犬小屋」等にも用いられており、性を表現するうえで向田の得意の手法であることは疑うところがない。小林竜雄の『向田邦子恋のすべて』^[13]は、シナリオにおけるエロスの嗅覚的手法を検証しているが、シナリオ『あ・うん』

では先に挙げたような表現ではなく、もつと直接的、言うならば視覚的に表現されている。たとえば『続あ・うん』「実らぬ実」において、石川が舞台監督をしている共産主義系の学生演劇で、人数合わせのため石川がさと子に出演を請う件がある。さと子は緊張して胸が高鳴っていることを伝え、石川の手を胸に当てさせるのである。一方小説『あ・うん』では映像表現で踏み込むことが難しい部分を、語り手が人物になり代わって語っている。

さと子の恋の過程は、考えようによつては安易である。もちろん、恋がそういった一面をもつものであることも否定はしない。君子が勧めた見合いで、帝大生というだけで辻村に「半分恋をして」しまつたり、初太郎の腹違いの弟作造に付添つて早稲田大学までゆき、そこで出会つた石川に早くもときめいたりしている。門倉や女学校の先生以外に男性と接点がなく、雰囲気そのものにのぼせてしまうのである。それでも喫茶店「蛾房」で辻村から「自由恋愛」という言葉、家と家ではなく、男と女が恋愛によつて結ばれるという図式を与えられる。その恋が終わり、新たに石川と出逢つて、親に反抗しながらも困難な恋愛を成就させようとするのである。蜘蛛が糸を吐くのも、男女が一つのコップで水を分け合つて飲むのも広い意味での性行為と考へていた向田であるから、さと子が親にだまつて辻村と逢

い、そのときはじめて飲んだコーヒの描写に「男とふたりだけでのむ黒くて重たい液体」と含みをもたせたのも情交を意識してのことであろう。門倉とたみがどういった関係であると考えるかを尋ねるさと子に對して、肉欲を排したプラトニック・ラブだとする辻村の判断を、読み手は安易に受け入れずに再考せねばなるまい。もはやプラトニック・ラブは成立の余地さえ疑わしい。

たみの場合を考えてみると、詳細は不明だがおそらく見合いで仙吉と結婚することになり、そこには恋愛の觀念すらなかったであろう。嫁いだからには夫を立てるのが妻の義務と心得ているのである。だから門倉のことが琴線に触れることはあっても、義務を放棄したりはしない。もつとも、たみの心の動きを見れば、仙吉を裏切っていると言えなくもない。仙吉と言いつつ後、転寝して門倉に抱かれる夢を見たたみは水を浴び禊する。さと子の駆け落ち騒動のとき、酔って眠ってしまった仙吉と門倉の間で、たみは自分の足を門倉の足に寄せようとして留まり、元の位置に戻すという場面があるが、それよりもはるかに夢で門倉に抱かれたことに重大性を感じている。意識の及ばない夢のなかで門倉に抱擁されるといふことは、寸でのところで振り払ってきた自らの欲望を、鏡に映すようにまざまざと見せつけられてしまったということに等しい。当然、こんな

話をわざわざ夫にする必要もないのだから自分だけの秘密として黙っておくのである。

「芋俵」にも秘めることを選択する女が登場する。夫の暴力に耐えかねて家を飛び出したふみは、それをほう助した作造と関係をもつ。姦通罪だと慌てる仙吉と、対照的に自分の人生は自分の好きなように生きるべきだと感心する門倉とを尻目に、君子が水入りにすることを提案する。結局ふみは提案を受け入れ、夫の元に帰るのである。ここで考えるべきは、ふみが夫を裏切り、追いつがる作造をも押し退けたことである。事實は裏切りでも、自らの胸に秘めることを選択した以上、それを夫に知らなければ裏切りにはなり得ない。作造との間にあったことは、単なる「夢」にしてしまうのである。ふみと作造の騒動は、仙吉・たみ・門倉の関係がはらんでいる危険性を示すデモンストレーションであり告発である。当初は自分と他人と規範とに揺れもするが、秘める決意をしてしまえばそこに他者が入り込む隙間はないのである。ふみの決意が、二人の男の頭上を越えるものであることを指し示している。それというのも、姦通罪のもつ性質が圧倒的に女に不利だからでもある。割り切れないものを割り切ろうとしたこの法律は、かえって「女」の秘める行為を助長したかもしれない。身勝手を厳しく制した家長制もわかりであろう。

たみは言うまでもなく、ふみは事実をなかつたものとして実生活に戻ってゆく。さと子にしても、辻村との交際があったことを石川に打ち明けることはおそらくない。実生活の安穩は、胸に秘められた大小の秘密の上に成り立っているのだとも言える。いずれにしても「日本の女」や、親に反抗しつつある面では親を越え、ある面では親を踏襲したその娘が、決して口を割らないであろう胸の内や過去、それらを可能な限りあぶりだして見せるようにしていると思われるのである。

我々の生活はまぎれもなく、親疎を問わぬ他者との結びつきで成り立っている。とはいえやはり、間柄の近い他者との生活にこそ、強い（ときに束縛とも思えるような）結びつきを感じ取るわけである。喜びはもちろん苦しみやかなしみもまた、他者と係ることによってもたらされる。それゆえに自我と他我との間で煩悶することになるのである。他者との係りのなかで何をあきらめ、何を守ろうとするのか。自己を支えているもの、自己が支えているものは何か。そういう視点に立つてこそ、向田邦子が見つめようとした人間の営み、あるいはきわどい性の問題にはじめて立ち入ることができるのではなからうか。

注

〔1〕『向田邦子全集第三巻』（昭和六十二年八月文藝春秋）収録『あ・うん』。以下『あ・うん』本文の引用はすべてこれに拠った。*初出は「狛犬」から「やじろべえ」にあたる「あ・うん」（昭和五十五年三月号『別冊文藝春秋』）、「四角い帽子」から「四人家族」にあたる「やじろべえ（あ・うんパートⅡ）」（昭和五十六年六月特別号『オール讀物』）。主要本として単行本『あ・うん』（昭和五十六年五月文藝春秋）がある。

〔2〕文庫本『あ・うん』（昭和五十六年四月初版発行、平成十五年八月新装版第一刷発行、十八年第四刷発行文藝春秋）山口瞳による「解説」に「『あ・うん』は、本来、小説家ならば、三年も四年もかけて、じっくりと書きこむべき性質のテーマと内容を持った作品である」とある。また豊田健次『それぞれの芥川賞直木賞』（平成十六年二月第一刷発行、同三月第二刷発行文藝春秋）の第二章で、「昭和五十四年の暮」ごろに向田から「放送台本の小説化というかたちでやってみよう」という提案を受け、試写会後に豊田が改めて向田に小説化を依頼し、『別冊文藝春秋』（昭和五十五年三月号）に「あ・うん」が掲載された経緯が記されている。

〔3〕 栗原敦は『向田邦子研究会通信』第八十一号所載（平成二十四年七月二十八日向田邦子研究会）「向田邦子（研究）の課題——回顧と展望——」で「もっと女の自我に力点をおいて語るべきだろう」と述べ、「表面を飾る男の友情の背景というか、隣に並ぶ女たちの自我のあり方にもっと光をあてるのが、この作品を（本当に）読むことにつながるはずだ」と指摘している。

〔4〕 シナリオ『あ・うん』の自筆原稿はかこしま近代文学館に収蔵されている。

〔5〕 高島俊男『メルヘン誕生——向田邦子をさがして』（平成十二年七月いそっぷ社）「第五章ドラマと活字」参照。

〔6〕 鴨下信一『名文探偵、向田邦子の謎を解く』（平成二十三年七月いそっぷ社）「第七章不倫、という武器」参照。

〔7〕 『向田邦子全集第二巻』（昭和六十二年八月文藝春秋）収録「甘くはない友情・愛情」。*初出は同題（昭和五十六年八月『日本経済新聞』）。

〔8〕 小林竜雄『向田邦子の全ドラマ——謎をめぐる12章』（平成八年三月徳間書店）「第九章なぜ、〈父〉は愛を告白しないのか？」参照。

〔9〕 小説『あ・うん』には記述がないが、シナリオを単行本化した『向田邦子TV作品集9あ・うん』（昭和六十二年六月大和書房）「こま犬」で仙吉は「俺ア、ほかはな

んにも持っていないけどさ、この二つだけは——いや、それだけじゃあないんだ……もうひとつあら。三つだけな」と、自分の持っているものとして女房と子供と親友の門倉をあげている。

〔10〕 前掲『全集三巻』収録『寺内貫太郎一家』「1身上調査」に貫太郎の妻寺内里子について、「引つめ髪に地味な和服で一日中、クルクルと働いている。色白の美人でまだまだお色気も捨てたものではない。やさしくて、よく気がついて、それでいてシンの強い、昔、沢山いた日本の女である」とあり、たみを造形するにあたって「日本の女」像が踏襲されている。*初出は同題（昭和五十年四月サンケイ出版刊）。

〔11〕 水田宗子『ヒロインからヒーローへ』（昭和五十七年十二月第一版発行、平成四年六月新版第一刷発行田畑書店）「第一章女性幻想の諸相」に「男性は往々にして、女性の自我を〈妻〉という役割のもとに封じこめ、自らの自我の延長としてのみ認識しようとする。したがって、恋愛は結婚とともに終わるのだが、それは夫が妻の自我を他者の自我とは認めないつもりになっただけであって、実際には、女性の自我は簡単には夫の自我の延長にはならなかったのである」との指摘がある。

〔12〕 「独身同士のHOT対談」（昭和五十六年五月一二日・

一九日合併号『週刊女性』性と日常を切り離して考えることはできないという旨が述べられている。人間の性の営みは「二十四時間のなかの一時間であったり、一生のうちの何時間であったりする」のであって、「セックスだけをとり出して書くというのは、むしろ性を書いて」いないと主張する。この対談は『隣の女』（TBS系列同年五月一日）の主演女優桃井かおりと向田とで行われたものであった。性とは何かという問題に、向田が並々ならぬ関心をもっていたことがわかる。

【13】小林竜雄『向田邦子恋のすべて』（平成十五年九月中央公論新社）「第三章向田邦子の『エロス』表現」参照。著者の小林が「露骨にフロイト的」な解釈というように、そのきらいがあるが、関係者への取材をとおして向田が描く性に迫ろうとしている。

【14】『向田邦子TV作品集1阿修羅のごとく』（昭和五十六年十二月大和書房）の月報で、「断片・向田邦子」と題して「ホームドラマの世界」ではタブーとされていた性の問題に挑戦しようとする向田との思い出を和田勉が書き記している。

（やまぐち みなみ・実践女子大学大学院博士後期課程）